

25

『人元脈影帰指図説』の文献学研究

沈 澍農

南京中医薬大学

『人元脈影帰指図説』（以下、『脈影』）は明代の脈学書だが、関係者の記述に相違がある。

一 版本記載と本文の相違

『脈影』は主な版本が3種あった。第1は明崇禎の沈際飛刻『脈経』の付録本（以下、沈本）とその単行本で、両者は同一版木による。第2は明天啓の繆希雍刻『脈経』の付録本（繆本）。第3は日本の慶安3年（1650）村上平楽寺翻刻『脈経』の付録本（村上本）と、その単行本である。3本の全文を対校したところ繆本の錯誤が最も多く、これに沈本が次ぎ、村上本が最も優れていた。

二 主な関係者

『脈影』は多く『脈経』に付随して刊行されてきた。そこで『脈経』とともに考察した結果、以下の明代の4人が関係していたと思われる。

①袁表 字は景從、閩県（今の福州）出身。嘉靖37年（1559）の挙人で、万曆（1573～1620）初に中書舎人を授任、戸部郎に遷じ、黎平知府に終わる。馬燮同と『閩中十子詩』30巻を編纂し、影響は頗る大きかった。沈本と村上本には「皇明福建承宣佈政使司右参政徐付校『脈経』手札一首」が前付される。この手札は徐付（字、中行）が校正に袁表を招聘した時の書簡で、こうある。「此れ王氏『脈経』の真本たり。後は韻に依りて歌を成し、牽綴を免れず。……」と。「韻に依りて歌を成し」が『脈影』を指すのは、『脈影』だけが歌訣を使用することでわかる。本書簡より、袁表が『脈経』と『脈影』を校勘・整理したことも確認できた。

②繆希雍（1546-1627）明代の著名な医薬学者で、字は仲淳、慕台と号し、海虞（今の江蘇常熟）出身。著書に『医学伝心』『神農本草経疏』『本草单方』『先醒齋医学広筆記』がある。繆本の首頁に「繆仲淳訂証／王叔和脈訣」とあるが、実際は『脈経』に『脈影』を付録したにすぎない。繆氏が実際に校理した記録がみあたらないため、彼がいかなる関与をしたかは不明瞭だった。

③沈際飛 明代の戯曲理論家で、字は天羽、震峰居士・江蘇崑山人と自署した。生卒年不詳。著書に『草堂詩余正集』『草堂詩余新集』『独深居点定玉茗堂集』などがある。沈本『脈経』には「明晋安袁表類校／鹿城沈際飛重訂」の署名2行があり、『脈影』には「明鹿城沈際飛重訂」と署名する。したがって沈際飛が袁表校本に基づき重訂したのはわかるが、具体的にどうしたのかは全くわからない。

以上の3人では、袁表が万曆3年（1575）に校理したのが最も早く、かつ真実性を確信できる。その次が繆本、再次が沈本となろうが、繆希雍や沈際飛は書商による託名の可能性を排除できない。

④龔居中 明代の医家で、字は応円、別に如虚子と号し、江西金溪出身。医術に精通し、内・外・婦・児の諸科に長じた。彼の名は中国刊本に見えないが、日本の村上本『脈経』（付『脈影』）に整理者として出現する。『脈経』の書題以下の署名で、村上本は沈本より「雲林龔居中鑑定」の1行が多い。この7字は龔居中が『脈経』の刊行に参与したことを示し、彼が『脈影』の刊行にも参与したであろうことは相当のレベルで認めてよからう。村上本『脈経』に龔居中の署名があったため、村上本『脈影』が沈本より優れる20余処は、龔居中による修訂だろうと推測できた。

三 版本の系統関係（略）

四 『脈影』の学術伝承（略）